

髪友がつなぐ物語

真の奉仕の心

花巻市立花巻北中学校一年

伊藤 彩綾 いとう さあや

ヘアドネーション。最近では芸能人がSNS等で寄付したことを公表したりして、この言葉が世界中に広まっている。ヘアドネーションのヘアは「髪」、ドネーションは「寄付する」という意味から、長くのばした自分の髪を寄付し、「医療用ウィッグ」として、病気やその治療の為に髪の毛を失ってし

2

1

まった子供たちのために使われるというもの。この本には、ヘアドネーションに挑戦したさまざまな体験談が載っているが、その中で印象に残ったものは、長い髪のサッカー少年木村仁くんの話だ。仁くんは、兄のように慕っていたところが病気の治療の為に髪もまゆ毛も抜けてしまったことがきっかけで髪を伸ばし始めた。男の子が髪を伸ばすということもあり、始めは理解されず、周囲の心ない態度や言葉がたくさ

人あつた。それでも仁くんは、自分の行動を繰り返して伝えたことで、クラスメイトはしだいに理解してくるようになった。

それでも、からかったりする子や、仁くんのことを知らない大人達の視線もあつた。仁くんは、みんなに理解してもらえないことが悲しかつた。しかし、いと同じように髪がなくて辛い思いをしている人たちがいることに気づくと、あきらめない気持ちが強くなつたのだ。髪を伸ばして寄付するだけの簡単

なボランティアだが、思いやりと強い心がなくて、は到底やりとげられないことなのだ。

一度目の寄付での感謝のコメントを読んで、ヘアドネーションを通して、誰かのうれしいことを増やせることに気づいた仁くんは、その後、二回のヘアドネーションに挑戦した。仁くんの行動力と勇気が次第に周囲にも広がり始めた。それを感じた仁くんやジャーダックの渡辺さんは、一病気が治るといいな。という、自分よりも相手の心を想う気持ち

表れていた。真の奉仕の心とは何かを教えられた気がした。

実は、私が小学校二年生の時、母が抗癌剤の治療で髪の毛が全部抜けた時期があった。五年たった今、以前と同じようには生えていないが、母はいう。

「生えただけ幸せ。病気が治って幸せ。」  
また私の髪は、生まれた時からくせ毛がひどく、よく

パーマをかけているの？」



6  
と誤解される。年頃なのでこのくせ毛にイライラする私だが、何よりもこの十三年間健康に過ごせたことに感謝している。

あとがきでは、  
「ウィッグは、私のためではなくみんなの  
ためにエチケットとして着けているんです。  
ウィッグは誰のために必要なの、その答え  
は一つではありません。」

と結ばれている。  
母もよくウィッグをかぶって家に戻ってく

ると蒸れて頭が痛そうだったし、皮膚がデリケートになつていたのでチクチクして出血したりしていたのを思い出す。

家で安心してありのままの姿でいる母を改めてみると、私達姉妹が傷つくことのないようにウィッグを着けてくれた母の優しさと氣遣いが理解できる。そして何より病気が治ったことを一番嬉しく思う。

渡辺さん達はこの活動が続けて八年目になるそうだが、そして渡辺さんは、一度も自分達

の活動が立派なこと、感謝されること、ほめられるようなことだと思つたことがないそうだが、なぜなら、ウィッグが必要な世の中が来ること、髪がないことに偏見を持たれないで、ごく普通の生活を送れること、を願つてゐるからだ。

もしかしたら、私の身近なだけか、私を氣遣つて着けているのかも。そうであるなら、私も仁くんのように優しい心を持つて接していきたい。